

# 注連縄にみる伝承形態の調査研究(V)

— 北陸地方 —

## A Study of Traditional Form "Shimenawa"(V)

— in Hokuriku Area —

佐藤 武郎

Takeo Sato

河野 公記

Masanori Kawano

### まえがき

今回は北陸地方（福井県・石川県・富山県）で民間に伝承されている注連縄の形態をまとめたものである。

前回までの西日本各地の調査では予想以上の形態をみることができた。したがって北陸地方の注連縄に殊更斬新で異種の形態をみたわけではないが、しかし、富山県では注連縄の用法に「お国柄」の相違をみた。例えば、九州地方では玄間框に飾るが、富山県の場合には屋内に神棚を設けて注連縄を張り渡す。したがって街の家々を外部から見ても注連縄はみあたらぬのである。

以下、本文で詳細を提示するが福井県の主流となる注連縄は「牛蒡ジメ」で石川県では「輪ジメ」と「牛蒡ジメ」の2種であり、富山県では「牛蒡ジメ」「一文字ジメ」「輪ジメ」の3種であった。

### I. 研究目的

正月の「シメ飾り」=「注連縄」をデザイン的見地より調査分析して、注連縄のもつ造形的様相美の再見を目的とする。

### II. 調査研究の手続

1. 北陸地方（福井県、石川県、富山県）において一般家庭で飾る注連縄。

#### 2. 調査期間

1981年～1982年（各12月26日～12月31日まで）

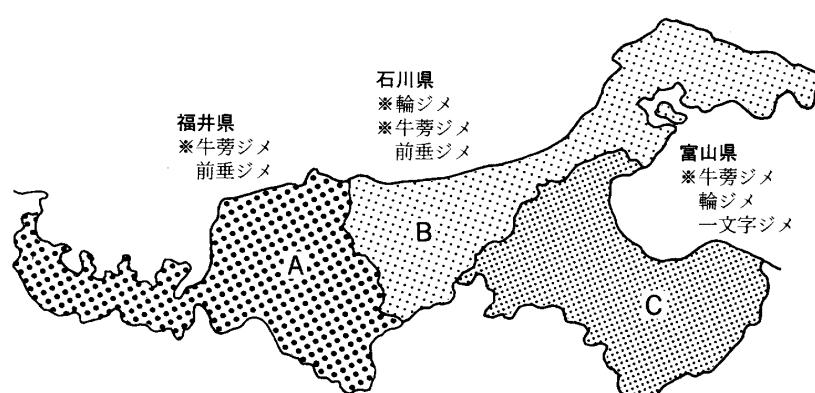
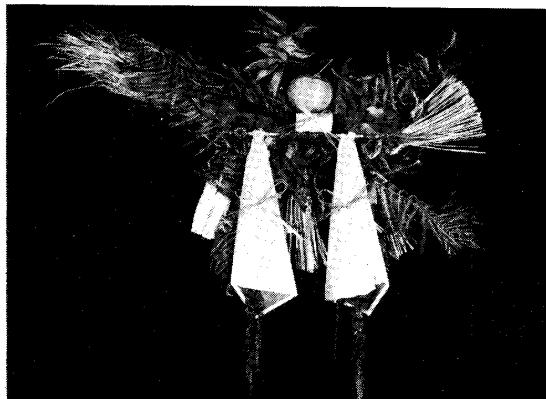
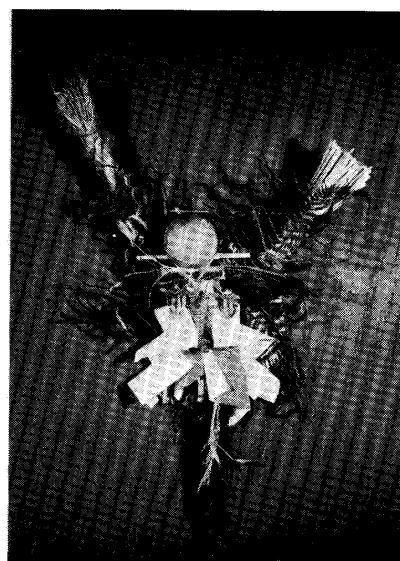


Fig 1 北陸地方注連縄の形態分布図



※福井県 Fig 3-a



福井県 Fig 2-a

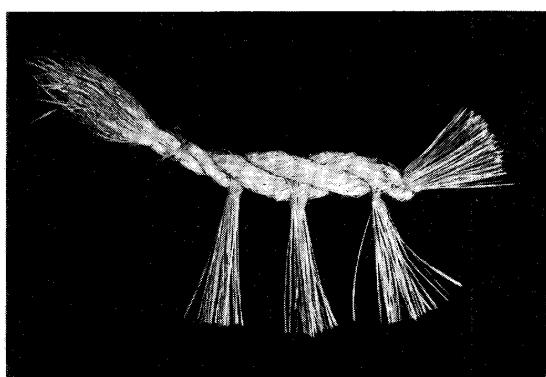


Fig 3-b

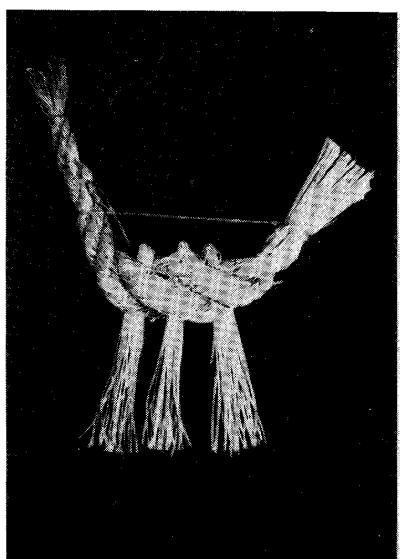
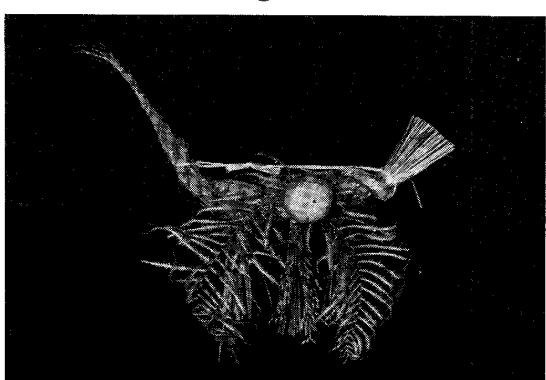


Fig 2-b



福井県 Fig 4-a

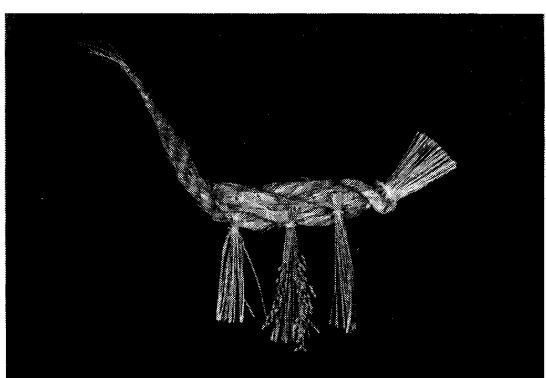
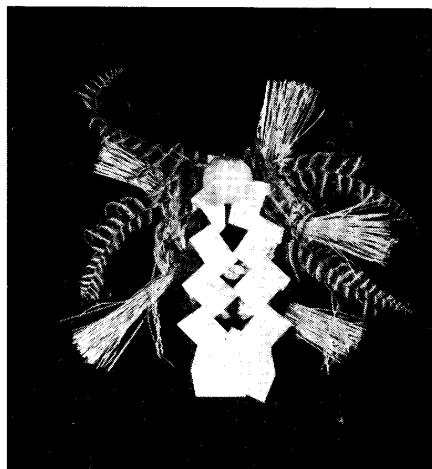


Fig 4-b



福井県・石川県 Fig 5



※石川県 Fig 6-a

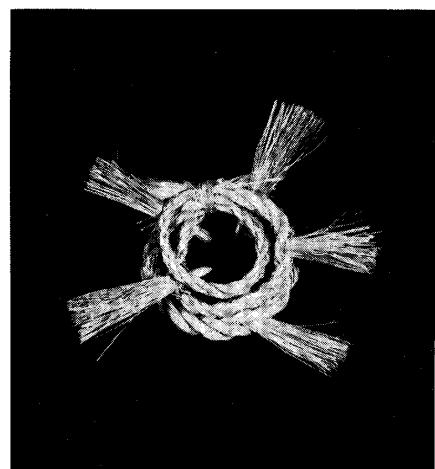


Fig 6-b

### 3. 収集の手続

- 北陸地方各県に出向いて収集を行った。
- 4. 写真による形態の記録。
- 5. 注連縄の付属物（飾り）を除去した基本体（基形）の構造分析。

### III. 考察と結果

北陸地方の3県では、特に福井県と石川県の注連縄に類似的なものをみた。但し、能登地方の注連縄はその形態、用法共に富山県と同様の伝承である。

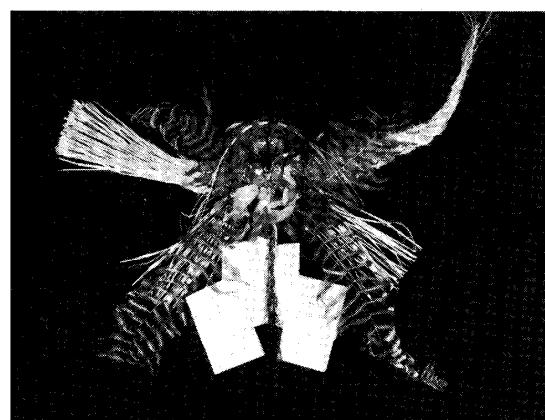
主流となる基本形は「牛蒡ジメ」であり、見方によっては Fig 8・Fig 9・Fig 10の場合「一文字ジメ」ともいえる形態である。

金沢市内では「輪ジメ」も多くみられた。また、市民会館、役場等の公共施設、あるいは Fig 5 のように民家でない場合、前垂注連がみられる。前垂注連は横の長さが100cm～150cmもある大きなものであり、特別注文で作られる。福井県、石川県の都市部でそれぞれ数回みかけた。

さて、各県別に考察をすすめるが、挿図※印は各地域の代表的（主流をなす）形態とみてよい。本研究で使用する形態分類用語は民俗学用いられている4つの分類、つまり「牛蒡ジメ」「板ジメ」「輪ジメ」「一文字ジメ」の4種に「前垂注連」を加えて考察した。

#### 1. 福井県 Fig 1-A (牛蒡ジメ、前垂注連)

Fig 2-a は福井市内、宝工町で収集した牛蒡ジメである。大ぶりでシメの形が上部に大きく反り返って力強いシメである。図のように御幣は紅白の紙を重ねて水引で結ぶ。さらに中央



※石川県 Fig 7-a

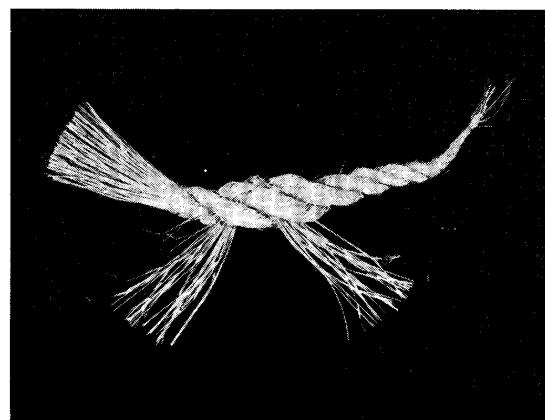
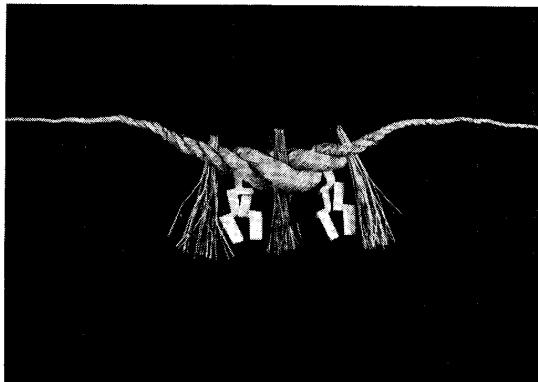
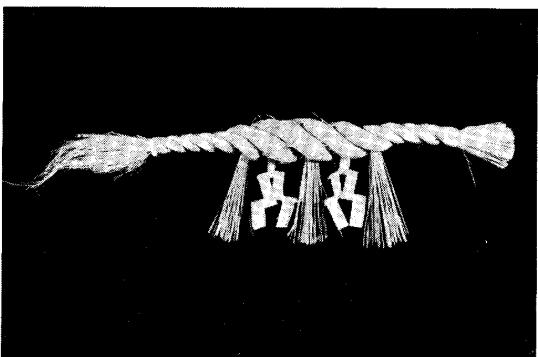


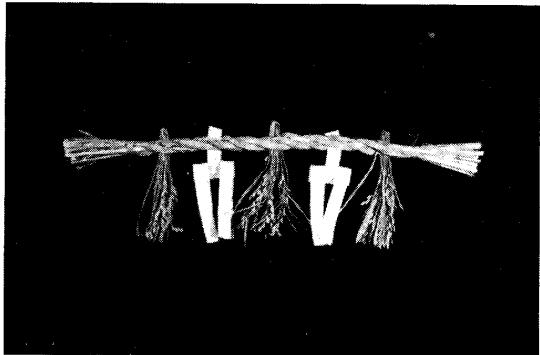
Fig 7-b



石川県・富山県 Fig 8



石川県・富山県 Fig 9



富山県 Fig 10



Fig 11

部に真紅の紐であみ上げた言呂合わせの「蝦」を飾り華やかである。他に「だいだい」「裏白」「譲葉」「串柿」「玉藻」等の正月の十飾り<sup>1)</sup>を飾る。

Fig 2-bでみられるように、シメの中央部が太く、シデは3条さげる。Fig 3-aは同県武生市で収集した牛蒡ジメの注連縄である。これもきわめて大ぶり(55cm)の堂々たるフォルムのシメである。飾りも多く、「御幣」「裏白」「譲葉」「だいだい」「串柿」さらに、左右対称にさげた「熨斗」には紅白の水引を掛け「昆布」をくるむ。Fig 3-bの礎形はFig 2のような反りではなく、いずれの礎形もシデは3条さげる。

Fig 5は、先に述べたように「前垂注連」をベースにして、Fig 3の注連縄を重ねたものである。これは鮨屋のものであるが、市民会館にも同じものをみた。

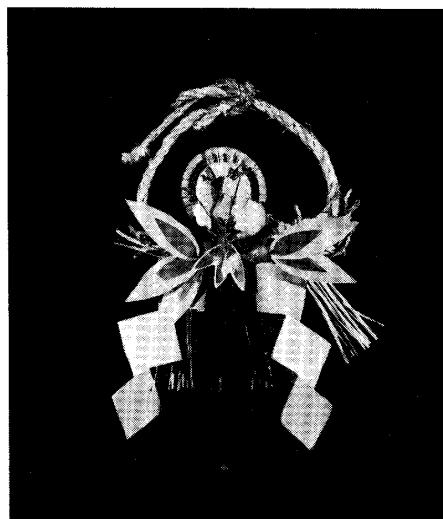
Fig 4-aは、福井県西部、若狭国府のおかれた小浜市で収集したものである。シメを上部に反らせるため左右を紐でつるしてある。飾りは「だいだい」「裏白」である。Fig 4-bのようにシデの中央部に稻穂をさげる。

以上のように主流をなす注連縄を収集することができたが、福井県を全県的にみれば民家に注連縄を飾る風習はかなり、衰退しているとみてよい。

## 2. 石川県 Fig 1-B (\*牛蒡ジメ・\*輪ジメ・前垂注連)

Fig 6-aは金沢市内で収集した輪ジメである。飾りは「裏白」「御幣」「だいだい」「譲葉」である。Fig 6-bでわかるように、礎形は3重輪である。注目すべき点を上げると、シデの付け方に特殊なものがみられる。たとえば山口県<sup>2)</sup>、島根県、広島県<sup>3)</sup>、三重県<sup>4)</sup>の場合にも輪ジメはみられるがシデの用法が異り、Fig 6-bのように5条のシデを放射状に付加するものはない。

Fig 7-aは石川県加賀市で収集した牛蒡ジメである。加賀市では古来よりこの様な牛蒡ジ



富山県 Fig 12-a

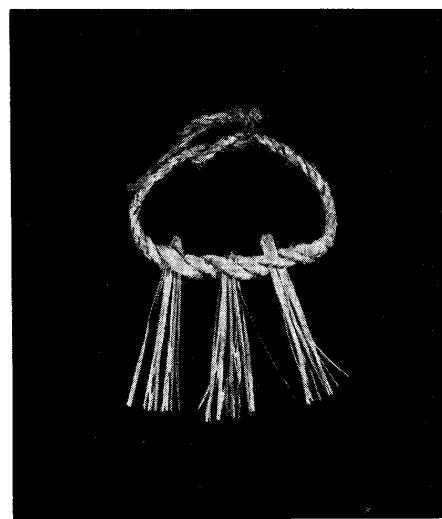
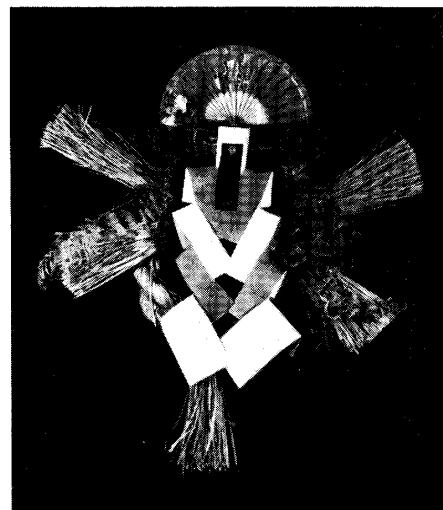


Fig 12-b



富山県 Fig 13-a

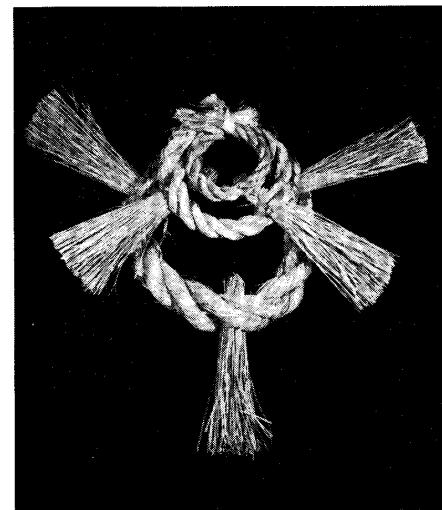


Fig 13-b

メであるという。飾りは「だいだい」「裏白」「譲葉」水引の付いた「扇面」を飾る。Fig 7—bでみられるようにシメの綺い尻が右向きであり、しかも、シデは2条さげる。

さて、石川県北の能登地方は七尾市から穴水町を経由して、珠州市、輪島市を回わる。さらに富来町を経由して羽咋市と能登半島を一周したが、この地方ではFig 8、Fig 9のような牛蒡ジメである。石川県北部は金沢市を別にして、17町4市があるが、門口に注連縄を飾る風習はみられず、富山県と同様の仕方で牛蒡ジメ、あるいは一文字ジメを屋内にまつる神棚の下に飾る。Fig 8、9、10の注連縄はいずれも富山県と共通の形態であり、最上部に神棚、その下に注連縄、さらにその下部にFig11のような松竹梅を配した福、あるいは寿などの文字をあしらった剪紙を貼る。この剪紙のほかに数種の墨書がみられ、福壽・豊饒・繁昌・大漁・宝来、等々の祈りや祝い言葉の語呂の良いものを選ぶわけである。大漁祈願の半紙4倍もの墨絵までみかけた。

### 3. 富山県 Fig 1—c (牛蒡ジメ、一文字ジメ、輪ジメ)

前掲の能登地方の注連縄と同様の牛蒡ジメ、あるいはFig10のような一文字ジメである。Fig 8、Fig 9、Fig10、をみると、牛蒡ジメ、一文字ジメの判定は明確にはできない。Fig12—a は

富山県北部魚津市で収集した輪ジメである。Fig12—bの礎形の上部の結びを解けば、Fig 8のような長い一文字ジメになる<sup>5)</sup>。富山県では民家の玄間框に注連縄を飾る風習はほとんどみられず、屋内に設けた神棚、あるいは「年棚」<sup>6)</sup>の飾り方が主流である。Fig10の一文字ジメは長さ30cmほどの比較的小ぶりのものであるが、Fig 9の場合95cmもあり、巨大なものは2mがあり、大、中、小と数多くみることができた。この種のものはシメが素朴であり、中央部のふくらみと左右のシメの細い部分がほどよく釣合って、シンメトリーの美がみられる。

シデを3条中央部の太い部分にさし込む、この地方ではシデのことを「おひげさん」とよぶ。写真では注連縄の飾りは「御幣」だけであるが、墨書の短冊や裏白、だいだいを付加する場合もある。

Fig13—aは、富山県氷見市で収集した輪ジメである。形態的には石川県の輪ジメと同種である。飾りは造花の「松・竹・梅」「御幣」「譲葉」「裏白」さらに水引の掛けた「扇面」等である。Fig13—bのように礎形は3重輪であり、5条のシデを加える。この形態もシンメトリックなバランスのとれた形にデザインされている。直径約50cmで大ぶりであり、民家用ではなく、病院、役場などの公共的な場所に飾る。したがって、一般家庭で飾る注連縄の主流は先に上げた牛蒡ジメである。

富山県では注連縄の量は非常に多く、スーパーストアでは注連縄コーナーがみられる。しかし、九州地方と比較して大きく異なる点は、先に述べたように屋外に飾る風習をみかけないことがある。

### まとめ

古名で注連縄の形態をみると若狭、越前、加賀（福井、石川）では、牛蒡ジメでも近畿地方の（大根ジメ）と同様の礎形が主流であった。

能登、越中（石川、富山）では、牛蒡ジメあるいは一文字ジメであり、本文 Fig 6、Fig12、Fig13のような輪ジメがある。さらに、福井市、金沢市で「前垂注連」がみられた。

日本民俗文化大系、小学館、(1983、2・15)月報1の中で、谷川健一編集委員は「民俗学の対象となる民間伝承は戦後、とくに高度成長期をへて、いちじるしく稀薄になっている。日本の社会の風貌は一変し、残存文化は消滅の危機に瀕している」と述べておられるが、本年東京税関を通過した東南アジアからの輸入品目の中に、Fig 9と非常に類似した注連縄をテレビでみた。この事例は本研究の主眼が伝承形態の把握にあり、純粋な民俗学ではないが形態保存の面から伝承の信憑性に一抹の不安を感じている。

### 注および参考文献

- 1) 前沢衛彦著「日本民俗学全集4」P、522~523（十飾り）高橋書院（1959）
- 2) 佐藤武郎、河野公記著「大分県立芸術短期大学紀要第17巻」注連縄にみる伝承形態の調査研究  
—中国地方・1—（1979）
- 3) リ  
リ  
—中国地方・2—（1980）
- 4) リ  
リ  
—近畿地方—（1982）
- 5)、6) 世界思想社編「日本を知る事典」P・503参照 世界思想社（1961）
- 日本民俗文化大系第3巻および「月報」小学館（1983）